

IFEL 図書館学とその受講者

森 真理恵

連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）の民間情報教育局（CIE）のもと、戦後の日本における教育の指導者を育成する目的で、IFEL（Institute for Educational Leadership）という講習会が行われた。IFEL は 1948 年秋から 1952 年春までに 8 期にわたって開講され、その後日本が独自に第 9 期も開講した。日本の教育界に与えた影響は大きいと評価されている。IFEL の中では様々な分野の講習会が開かれ、それ以前には日本で学問として確立していなかった分野の講習会も含まれていた。このような IFEL の中で開講された図書館に関する講習会を本研究では IFEL 図書館学と呼ぶこととする。

IFEL 図書館学の先行研究には根本彰らのものがあるが、受講者の側について丹念に検討した研究は見当たらない。そこで本研究は、『占領期教育指導者講習会研究集録 図書館学』と『IFEL 図書館学』をおもな資料として用いつつ、IFEL 図書館学の授業の詳細や、受講者が IFEL 図書館学の受講後にどのような興味を持続させていったかの検討を通じて、IFEL 図書館学の影響を明らかにすることを試みた。

資料として用いた『占領期教育指導者講習会研究集録 図書館学』は、第 6 期の受講者による複数の少人数グループ研究の成果をまとめて 1951 年 5 月に刊行された（同年 6 月に改訂版も刊行）もので、IFEL 図書館学の授業の詳細にも触れている。第 5 期および第 6 期の受講者を中心につくられた雑誌『IFEL 図書館学』（IFEL 図書館学会の機関誌）は、IFEL 図書館学の受講者が、講習会を終了したあとの各自の研究成果を発表するために創刊したものである。1952 年から 1963 年までの 11 年間に全 12 号が発行された。掲載された論文は、当時の日本の図書館の劣った状況やその後に取り組むべき課題を中心に扱っており、提言を述べた文献も多い。

これらの資料を中心に分析した結果、IFEL 図書館学の受講者は、もともと図書館に何らかのかたちに関わりを持っていた者が多く、講習会を本人の強い意志から自発的に受講していたことが分かる。そのような IFEL 図書館学の受講者たちの関心は、おもに視聴覚資料、読書指導、レファレンスサービスに向けられており、雑誌『IFEL 図書館学』に掲載された論文にはそれらの重要性を主張するものが多い。また、IFEL 図書館学の授業ではアメリカの図書館事情が教えられることが多く、そのことは受講者に大きな影響を与えたことがうかがえる。それに比べて、当時の日本の図書館界の状況については、あまりに劣っているとの認識を受講者たちは抱いていた。本研究では、IFEL 図書館学の講習会が、受講者にとって、アメリカの先進的な考え方、より理論的に確立された図書館学を学ぶ機会であったということ、実証的に明らかにできたと考える。

（指導教員 原 淳之）